



「ビックリ遊園地」

脚本：綾奈ゆにこ

ピーター 「わ〜い、ビックリ遊園地だ〜！ マリスさんマリスさん、写真撮りましょうよ！」
マリス 「こんな入口で？ 少し歩けばフォトスポットがあるそうだが」
ピーター 「もちろんそこでも撮りますけど、マリスさんとの初めてののお出かけたから……
最初から写真に残しておきたくて」
マリス 「そうか。ではピーター、そこに立ってくれ。私が撮影しよう」
ピーター 「え〜、マリスさんも一緒がいいです！」
マリス 「私も？」
ピーター 「僕のスマホで撮りますね。む〜、マリスさんが入らない……」
マリス 「私がしゃがもう。これでいいか？」
ピーター 「バッチリです！ それじゃあ、ビックリ〜って合図をするので
一緒に言ってもらってもいいですか？」
マリス 「む、ビックリだと？」
ピーター 「ビックリ遊園地では定番の掛け声なんです」
マリス 「なるほど。やってみよう」
ピーター 「えへへ、ありがとうございます。じゃあ撮りますね。はい、ビックリ〜！」
マリス 「ビックリ〜」

二人を尾行する一同。

ジャック 「マリスのおっさんが笑ってる……！」
牛若 「だいぶぎこちないがな」
フェニックス 「ビックリって言うことで自然に口角があがるんですね。私も使ってみよ〜」
ヤマト 「ねえ、本当についてくの？」
ジャック 「たりめーだろ！ ピーターとマリスのおっさんが遊園地デートだぞ。
これはもう尾行するしかないだろ〜」
ヤマト 「いやいやいや。牛若〜」
牛若 「アホのアホは言っても止まらないからな。俺はアホの監視だ」

ジャック 「三回もアホって言った！」
フェニックス 「私は君たちの足兼、保護者代わり。言っておくけど、二人の邪魔はしないようにね」
ジャック 「はーい。お前らもなっ」
牛若 「フン」
ヤマト 「みんなで遊びに行くんだと思ってたんだけどな……アリババ来なくて良かったかも」
フェニックス 「アリババ君は？」
ヤマト 「今日は一本釣さんのところに行くみたいで」
ジャック 「ホシが動いた！ オレらも行くぞ」
ヤマト 「本当に尾行みたいだ……」

マリス 「この辺りは……絶叫系アトラクションエリアか」
ピーター 「わ、あれ楽しそう！」
マリス 「ビックリフォールか。高さ 45m から最高時速 90km で一気に垂直落下。
無重力状態も味わえる瞬間絶叫系マシンの最高峰。身長制限は 110cm だが？」
ピーター 「僕、そんなにちっちゃくないですよ！ もう、すぐ子ども扱い……」
マリス 「11 歳は子どもの区分だ。あるいは児童、年少者、未成年」
ピーター 「むー。今におつきくなってやるんだから…
…マリスさん、僕が大人になるまで待っててくれますか？」
マリス 「待つもなにも、年は重ねていくものだ」
ピーター 「そうだけど、そうじゃなくて～……！」

ヤマト 「二人とも楽しそうだね」
牛若 「そうか？ 先ほどから喋っているだけで全く乗り物に乗らないが」
フェニックス 「乗り物に乗るだけが遊園地じゃないですから」
ジャック 「そうだぞ牛若。ビックリマンシール大交換会に地下迷宮！」
フェニックス 「懐かしいですね～」
牛若 「正確にはビックリ地下迷路だ」
ヤマト 「みんなで幻のレアシールを探しに来たんだよね。色々あったけど楽しかったな～」

牛若 「楽しかったと？ 俺は散々な目に遭った。ダイオウイカに襲われたり……」
ジャック 「オレも途中から記憶ない」
ヤマト 「まあ僕もママになったりしたけど（笑）」
牛若 「それもこれも——！」
ジャック 「うおー！ 牛若ネタバレ！」
牛若 「（口ふさがれ）むぐー！」
フェニックス 「なんのことが分からないよい子ちゃんの皆さんは、
コミックス『ビックリメン バトルロイヤル』をチェックして下さいね」
ヤマト 「突然の宣伝！」
ジャック 「そして、同時発売の『私立メイドン女学院』は——」

×××

メイドン遊使(ジャック) 「なんとこの俺、メイドン遊使ちゃんがキュートに華麗に大活躍！
俺の前に立ちほだかるやばいやつらを紹介するぜ！」
メイドン霊使(牛若) 「メイドン霊使。ぎとぎともりもりまんぷくセット10人前」
メイドン幻使(ピータ) 「メイドン幻使。おねえさま、だーいすき！」
メイドン豊使(ウッド) 「メイドン豊使。てめえ……（一転、ぐすつと泣いて可愛く）もう一度、勝負だあつ！」

×××

牛若 「——っておい、またメイドンネタか」
ジャック 「ちなみに舞台が女学院だからってドキドキ百合展開を想像するとヤケドするぜ！」
牛若 「百合展開ってなんだ」
ジャック 「百合ってというのは～……」

×××

メイドン遊使(ジャック) 「霊使お姉さま、おぐしが乱れてますわ……♡」
メイドン霊使(牛若) 「か、勝手に髪にさわるんじゃない遊使……
こんな人目のあるところで、はしたない……っ（ドキドキ）」

×××

ジャック 「みたいなやつ～！」

牛若 「貴様! 邪(よこしま)なことを想像したな! そこに直れ!」
ジャック 「わ〜牛若がキレた〜!」
牛若 「逃げるな! アホ! 待て!」
ジャック 「アホなんて言うほうがアホなんだぜ〜!」

牛若とジャック、走っていく。

ヤマト 「ジャック! 牛若!」
フェニックス 「行ってしまいましたね」
ヤマト 「どうしよう……」
フェニックス 「うーん。ヤマト君お腹すいてない?」
ヤマト 「え? あ……実は……」
フェニックス 「ふふ、私もさつきからぺこぺこなんだ。何か食べに行こうか」
ヤマト 「いいんですか?」
フェニックス 「だって私たちには尾行の理由がないし?」
ヤマト 「確かにつ」

店の前にいるヤマトとフェニックス。

フェニックス 「ここは、軽食中心のお店みたいだね」
ヤマト 「ビックリホットドッグにビックリポテト……わあ、どれにしようかな〜」

アリババとフッドが来て。

アリババ 「ヤマト、フェニックス」
フッド 「チッ……」
ヤマト 「アリババ!? フッド!? なんでいるの?」
アリババ 「一本釣教室のお手伝い。お腹すいたって言ったら、食べて来なって」
フッド 「俺は手伝いじゃねえ。無理矢理連れてこられただけだ」
フェニックス 「ふーん、一本釣に?」

フッド 「なんだよ」
フェニックス 「彼ってふらふらしているようで、いてほしい時には隣にいてくれるというか。
悩んでいるひとをほっとけないたちなんですよ。フッド君、何か悩み事でもあるの？」
フッド 「ねーよ！ 勝手に決めつけんな！」
ヤマト 「あ！ みんな隠れて！」
フッド 「なんだよ——あ？ マリスとピーターじゃねーか。あいつら何してんだ」
フェニックス 「しー。見つかったちゃうよ」
アリババ 「お腹すいた……」
ヤマト 「アリババ、ちょっと我慢してね」

一方、マリスとピーター。

マリス 「ビックリ遊園地名物、ビックリトルネードアイスだ」
ピーター 「わあ、ありがとうございます！
すごーい、普通のソフトクリームよりすっごくトルネードしてる！ マリスさん、マリスさん」
マリス 「なんだ？」
ピーター 「あーん♪ 一口どーぞ」
マリス 「いや、結構。君のために買ったものだ、全部ひとりで食べるといい」
ピーター 「えっ……はい……いただきます」
マリス 「味はどうだ？」
ピーター 「おいしいです……」

×××

フッド 「ハッ、ざまあ」
アリババ 「フッドも、あれしてくれたことあるよね。あーん」
フッド 「あ？」
アリババ 「僕が亀だった時」
フェニックス 「へえ。アリババ君のこと、お世話してくれてたの？」
フッド 「世話なんかしてねーよ。結局食わなかつただろうが」

ヤマト 「あの頃のアリババ、全然食べてくれなかったよね」
フッド 「今はちゃんと食ってんだろうな」
アリババ 「うん。ヤマトの家のごはん、おいしい。おかわりもするよ。
——フッド、あの時は、ありがとう」
フッド 「フン、別に……。なんでてめえらまでニヤついてんだよ」
フェニックス 「ふふ、別に？」
ヤマト 「フッドらしいなって」
フッド 「ああ！？ 何が言っていただよ！」

そこへ牛若とジャック戻ってきて。

ジャック 「あ！ いたいた〜！ って、なんか人増えてる！」
フェニックス 「二人ともおかえり」
フッド 「てめえらまでいんのかよ」
アリババ 「牛若とジャック、二人で遊園地来たの？」
牛若 「なぜそうなる。尾行の途中だ」
ジャック 「マリスのおっさんたちは？」
ヤマト 「そこに……あれ、いない」
ジャック 「なにー！ 見失っただと！」

ピーター、しょんぼりしている。

マリス 「どうした、ピーター。疲れたなら少し休憩するか？」
ピーター 「疲れてないです！ でも……なんだか僕だけ楽しいみたいで」
マリス 「私は君が楽しんでいればそれでいい。そのために連れて来たのだから」
ピーター 「え？」
マリス 「以前、遊園地について口にしたことがあったろう」
ピーター 「……じゃあ、僕のために？」
マリス 「遊園地など幼い頃に行ったきりだからな。
事前に調べてプランを練ったが、不慣れなところもあったと思う」

ピーター 「そんなこと……！ ……嬉しいです。
マリスさんと一緒に遊園地行けたらいいなって、ずっと思ってたから……。
あの、マリスさん」

マリス 「ん？ なんだピーター」

ピーター 「えっと、あの……マリスさんと手……つないでもいいですか？」

マリス 「手？」

ピーター 「ま、迷子になっちゃうかもだから……！ ダメですか？」

マリス 「いや、構わないが？」

ピーター 「(嬉しい)！ ありがとうございます！ えへへ……マリスさんの手、ひんやりしてる」

マリス 「冷たいか」

ピーター 「嬉しいです」

マリス 「次の行先はビックリ観覧車だ」

ピーター 「観覧車！ 早く行きましょう！」

マリス 「ピーター、急に引っ張らないでくれっ」

ピーター 「夜までいっぱい遊びましょうね、マリスさん！」

END